
アビリティー・ウェイク

なごみーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリティー・ウェイク

【NZコード】

N9873Z

【作者名】

なごみーぬ

【あらすじ】

- 人々の生活の中に突如としてあらわれた“能力者”という存在・・
- ただの高校生として過ごしてきた主人公、”バレット・ルージット”は
- ひょんなことから能力者同士の過酷な戦いへと巻き込まれていく・・

様々な能力者や組織と交わる中、バレットが貫き続けるものとは・・

・?
・

自身のFC2ブログの方でも記事としてアップしています。無

断転載ではありますんでどうぞ承ください

1話 ウィクトルナンバー（前書き）

“ありがちな”能力バトル学園モノ”という題材で書いてみました
キャラクターの区別をつけやすいため、口調などは大げさにしてい
るつもりです

小説を書き始めて日も浅いので厳しい意見やご感想など大歓迎です

1話 ウィクトルナンバー

この世界はここ数年でガラリと変わった

何故か

簡単に言つと、能力という奴が世間一般に知れわたるようになったからだ

要は、怪光線や電撃を撃ち放つたり、高速移動やテレポートできたり…

そういう人間が世界各地で増えているようだ
能力を持つ人間は問答無用で優等生…成功者として称えられる存在なのだ

正直、無能力者からしたら羨ましいなんてもんじゃない
…まあ、正直こればかりは運なので仕方がない…よな…

⋮

→ミティオライト高等学校

時は4月の中旬

生徒たちは入学式も終え新しい校舎、学級にも多少は慣れを覚えつつある頃だろう

そんな中、休み時間無意義に机に突つ伏して過ごしている
棘々した髪型の男子生徒が1人

名を”バレット・ルージット”

バレット「はあ…」

机に散乱したプリントや教科書に眠そうな視線を送りながらため息をつく
そんなバレットに嬉しそうに近づく女の子が一人
金髪の長髪をなびかせている

名を”エリス・サジテール”

エリス「こらあバレット！お昼休みなんだから外行こ！外」

ふてくされた表情でエリスを睨みつけるバレット

バレット「そんな時間は無えよ、見ろよ」のレポートの数

エリス「ただの宿題じゃん！家でやればいいんじゃないの？」

バレット「今日中」

エリス「ええ…ん、でもそもそもバレットが授業サボつたり居眠りしたりするせいじゃないの？」

バレット「うるせーな…良いよなあエリスみたいな能力者様は、宿題はあらか授業すらサボつても単位やら進学には全く無問題」

エリス「私はちゃんと勉強してるよお…」

バレット「今日は午前の授業オールサボりだつたじゃねえか」

その言葉に苦笑いしたエリス、だがすぐに自慢氣な表情に変わった

エリス「ふふん 今日はこの高校の”ウイクトルナンバー”の第4位を負かしてやつたんだよ」

バレット「ウイクトルナンバー？なんだよそれ」

エリス「この高校には三十人近くの能力者が居るらしいのよね！そしてその中で最も強い7人がウイクトルナンバーと呼ばれるらしいまあ私が4位に勝つたから私が3位！」

バレット「ふーん…」

エリス「という訳で私はこれから1位をぶつ飛ばしてきます！」

エリス「あ！私が高校最強ベストワンになつた暁には飯を奢つてあげる！だからこの教室で首を長くして待つてなさい」

バレット「ああ、忘れてなればなー」

力なく手を降るバレットに満面の笑みを向け足早に教室から立ち去るエリス

バレット「でいうか…お前4位だろ…まあいいけど」

⋮

エリス「ちゃんと果たし状は読んでくれたみたいね！」

「はア…時代劇の見すぎじゃねえのか？」

エリス「靴箱に女の子からの手紙なんてドキッとしたんじゃないの
？第1位さん？」

「…つうか…とりまお前は死にたいってゆう解釈でいいのか
？」

エリス「ふふつ、第4位ですらあんなヌルイ高校のベストワンなん
て底が知れてると思うけど？」

「4位？4位…あー、なんだっけなあ…アクアパラソルだか
ライオディアスだつたか…」

エリス「私もどんな能力者か忘れちゃった、弱すぎて
あなたの能力も覚えてられるか怪しいなあ

「てかよお…お前ガチで頭悪いなあ

知ってるかあ？この高校のベスト3のメンバーは一年間ずっと
と不動なんだぜ？

第4位以下なんざ周一ペースで入れ代わってんだよ…
もう分かるよなア？4位以下と3位以上じやあ…圧倒的な実
力の大差があるんだよ…クヒヒヒ」

まるで悪魔のような笑いを浮かべる第1位に若干であるが恐怖を覚えた…

だがそれ以上にエリスは自分が一番強い…といつ自信を持っていた

エリス「ずいぶん喋る口数の多い1位さんね、4位を軽く捻られて焦ってるの?」

????「あ?クヒッ いいねえその溢れる自信喪つて良いね全然オツケー

そのプライド…ズタズタにしてやりたいわあ…じゃあそろそろ開戦つてことだえ…」

すると1位は片足を何かをしようとした

が、それと同時にエリスは片腕を前に出しそこから閃光弾のようなものを撃ちはなった

これは彼女の

大気中の空気を圧縮して利用できる能力
空気を圧縮し高質量の弾丸を放つたのだ

名を”本命空気～エアロバスター～”

が、確実に第1位へと向かっていったはずの弾丸は右に大きく反れ、近くにあつた花壇をぶち壊した

エリス「やるじゃない！」

間髪入れずにエリスは細かい弾丸を百発ほど放射状に撃ち放つ
攻撃を反らされるなど今まで戦ってきた念力や重量操作の能力者で慣れっこだ

？？？「クヒヒヒ…」

…まるで全ての弾丸が第1位を恐れるようにそれがバラバラに反れていった

鳴り響く爆発音…地面や壁、近くにあつた倉庫などはボコボコになつたが

第1位は傷ひとつ付いていない

エリス「つ…！」

？？？「さあ…て…俺は一体何をしたのかなア？
全く気づけていないアホ面にご褒美でえす」

第1位は足元の石を踏み碎いた

その瞬間、エリスに激痛が走つた

腹部に先程の石の破片が全て刺さつていた

エリスと第1位の距離は1.5メートルはある。まぐれで破片が全部こつちに飛んできた…とは考えにくい

これは…奴の能力

エリス「念動…力…？」

血が滲む腹部を押さえながら相手の能力の本質を見極めようと試みる

？？？「クヒヒヒ…つか、全然ちげえよ

てかそれじゃ超能力者つてか？そんなダセヒ代物じやあねえ
よ俺のちからは」

すると第1位は突然エリスの目の前まで迫ってきた

エリス「ひつ……」

驚くエリスの表情を見て一層笑顔を濃くした第1位はエリスの腕を掴み上げた

？？？「クヒヒヒやべぇマジで細い腕えやべーよ
つてか無謀な勝負にあつそり負けた敗者にじまじまに褒美を
あげようかなあ？」

エリス「や……やめ……」

（1A 教室）

バレット「はあ……もうレポートは無理そつだな……」

積もりに積もつたレポートを絶望的な表情で見つめ肩を落とすバレット

ふと外野の雑談が聞こえてきた

A「おい聞いたかよ、能力者同士が体育館裏でバトってたつてよお

B「おひひ、バックリしたぜ……しかも片方は高校最強だとよ……」

C「えひやり不動のまま相手を打ち負かしたとの事らしこですよ

今頃第1位にいたぶられてるんじゃないですかね」

バレット「…」ガタ

す」しばかり心配になつたので例の体育館裏とやらにて行つてみる事にした
おぼつかない足取りで「勉強どじょう」「腹減つたな」などとア
ップツ言いつつ歩いていると体育館裏に着いた

とりあえず人が2人居るのが見えた

エリスが血を流して倒れていますと…銀髪の黒服男子…

バレット「何してんだよ」

気付くと口が開きそづり言つていた

????「何つて…とこま…」豪美タイムつてところかなあ?」

バレット「何やつてくれてんだ…お前…」

気付くと拳を握り奴を睨み付けていた

エリスはバレットの幼なじみ、いつも無駄ににこやかに振る舞つて
それが今、苦悶の表情で地に伏せている
それがなかなかどうして許せはしないようだ

????「つか、お前はどういう能力で俺を全然楽しませてくれんのかなあ?」

バレット「無えよー能力なんて!」

？？？「は？」

バレット「むしろ欲しいへりだー！」

？？？「はあ…ブフッ…なんだよそりゃあ…ククアホかマジで
とつ…マジにひ弱な虫一匹があ…恐ろしい恐ろしい鷹に頭
摘まれにきたって事でいいんだよなー」

バレット「ああ、俺にはお前はヒヨコに見えるがなー。」

2話 デュアルブート

体育館裏

放課後もとうに過ぎ夜が訪れ始めていた

????「つーかよお…お前マジに頭悪いなあ…てか、自暴自棄にでもなつちゃつてんのかあ？」

脳無しの鼠に俺の名を教えてあげましょう、ありがたいだろ？

俺の名は”デフラグ・ブルーバック”つかお前はこの先一生この名前に怯えて過ごす事になるんだよなあ…可愛そうだわ…」

バレット「名前なんて聞いてねえ！エリスに何をした！」

デフラグ「あ？…あーいや、大丈夫だつて！ただ石ころを刺してやつただけさあ

ま…俺の事を一生忘れないように深く切つてあるがな…

クヒヒヒ

バレット「つざけんな…」の野郎！」

デフラグ「ふざけてんのはてめえだろ…無能力者が最強能力者にケンカ売るなんざギャグにしても笑えねえぞ」

バレット「つせえ！」バッ

バレットはデフラグに向かつて飛びかかった

デフラグ「クヒヒヒ…馬鹿だな…」地面から離れて直進する“なんて、マジに”軌道に乗つて俺に向かつてる”状態じやねえか”

確かにバレットは確実にデフラグに向かつ軌道に乗つていた
しかしながら全く違う方向の壁に追突していた

バレット「ぐはっ…」

左肩をぶつけ反動で地面に叩きつけられた

バレット「お前…何しやがつた…」

デフラグ「ああ？ ああ、ま、雑魚には教えても支障無えか

俺の能力は”一色配線～デュアルブート～”性質としては”軌道変化能力”つて言つた方が分かりやすいんだが

俺のデュアルブートは少しばかり異質な物も関わつてゐるらしいからまあ…本質とは違うわなあ

バレット「軌道変化…？」

デフラグ「てか…体で理解すれば良いんじゃねえのか！？」ドゴォ

疑問の表情を持つバレットに間髪いれず

横にあつた体育館倉庫の窓を蹴り割るデフラグ
すると割れたガラスは全てバレットの方へ向かつた

バレット「なつ……！」

すかさず飛び退き避ける

……だが避けきれず足に一発ほど食いつ

バレット「くつ……要は念力つてわけかよ……ややこしい説明すんな……」

デフラグ「てか念力じゃねーつってんだろマジで頭大丈夫かお前

俺が放つ攻撃は全てお前へ向かう軌道に向かう

だがお前の攻撃は全て俺へ向かう軌道から追い出されて
当たらねえ……はア……簡単じゃねえか……」

バレット「ぐつ……なら……！」ダッ

バレットはデフラグに向かつて走る

拳を高く振り上げながら……そう、肉弾戦に持ち込む作戦だ

デフラグ「はつはあ！無能力者は接近戦しかできねえわな！」ガキ
ン

更にもう一枚のガラスを割りバレットに向かわせる

バレット「食らうか……！」

素早く横に飛びかわす

すかさずデフラグの頬に一撃、パンチを浴びせる

デフラグ「ふはつ！」

バレット「その攻撃は”俺の居る場所”に向かってくるだけだろ！直進しかできないなら避けちまえばなんの意味も無い！」

「デフラグ「ツざけんなアー！」

殴られた驚きと怒りでぶち切れたデフラグは懐からナイフと数本のボルトを取りだし投げ即座にバレットへの軌道に乗せた

バレット「おま…ー…うぐつ！」

奇襲とも言えるその攻撃には左手でナイフだけでも庇う事しか出来なかつた
数本のボルトも刺さり左手は完全に負傷した

デフラグ「ツ…！」

はツ…てかしかしなんだアお前、能力攻撃に耐性知識ありすぎだろ

無能力者のくせによお

バレット「じちどら能力者様には憧れ敬いつぱなしなんだよ！」

何度欲しいと思ったか…でも俺には知識を付ける事しか出来ない

だが…お前みたいな能力者には憧れねえ！後輩の女の子1人いたぶつてニヤついて何が最強だよ！…」

デフラグ「つか…なんですかあそのつまんねー理由はア

とりまお前今自分がどうゆう状況下に居るのか理解できてんのか？」

すると上着をバツと開き

中から無数のボルトとナイフが姿を見せた

狼狽^{うるた}えるバレットの後ろで呻くような声が聞こえた
怪我で起き上がりえない体で、涙と泣き顔でくしゃくしゃな顔で彼女
は咳く

エリス「逃げて…バレット…私の為に戦わないでよう…」

エリスとバレットは幼稚園からの幼なじみだった
しかし体も弱く、自分勝手でケンカ腰で男勝りなエリスは
色々な所でいじめを受けたり、絡まれたりしていた
そんなとき、いつも助けてくれたのはバレットただ一人だった
ケンカで額から血を流していても、どこを怪我しても、”お前が無
事なら良かつた”その台詞と笑顔を何度も聞いたことか

エリスにとつてそれはコンプレックスになっていた
私がもつと強ければ、バレットは怪我をしないで済む
私がバレットに辛い思いをさせてる、不幸にしてる
そんなとき、彼女に能力が宿つた
強さを手に入れた、私は最強だ。バレットに守つて貰わなくていい
んだ
彼女のコンプレックスは消えた。

はずだった

バレット「お前を見捨てて逃げる…?出来るわけないだろ!!俺が
必ず守つてやる…」

デフラグ「俺が操れるのは単純に”お前を狙う軌道”だけじゃねえ！」

”どの方向から”狙つかも精密操作できるんだよー。

クヒヒヒハハアーー全方位から狙われたら流石に避けられねえよなあーーー

バレット「舐めんなーそんな程度でーーー」

デフラグ「おいおいーーーてか照準向いてんのはお前だけじゃねえんだが後ろの馬鹿女もだ！ハハハハアーーー」

バレット「なッ…てめえーーー」

やめて、そんな目で見ないで

バレットの目、怖いよ…まるで…自分を犠牲にしてでも私を…嫌だ…私の為に戦わないで…

エリス「バレットおーー逃げてよーー私なんか守らなこでよーーー」

バレット「何いってんだーー全く聞こえねーぞーーーそんな言葉ーーー」

デフラグ「いいねえーー…やベーよー…マジドーー…つか大切なもーー守つてみせろよーー…あ、あーー？」

じつやつて守るのか見せてくれよ偽善者さんよオーー

究極の一沢だぜーー？テメーの命かーー…女の命かーー…じつ
ち守るんだよーーー」

バレット「じつちもだーーー」

デフラグ「はアーー？」

バレット「大切な人なら死んででも守りたいさ！！でもな！」

死ぬのは間違いなんだ！死んでしまつたら大切な人を泣かせてしまう！悲しませてしまう！不幸にしてしまう！！

俺は生きてこいつを守る！！」

エリス「バレット…やだ…嫌…やめてよお…」

デフラグ「…………カツ 口つけてんじゃねえええ！！！」

デフラグは無数のボルトを宙に放つた
そして同時にデュアルブートを発動
バレットとエリスを囮るようにボルトとナイフが飛んでいく
そしてエリスの前に立ち塞がり一步も動かないバレットへと直進していく…

その瞬間

爆発が起きた

砂煙がデフラグに襲つてくる

デフラグ「ああ…？…つか…なんだよ…」りや…ふざけてんのかマジ
で…！」

砂煙が晴れ前方に目をやると炎が上がつていた
中にバレットが居る

バレット自身から出るその炎は、まるで盾のようになっていたボルトなど全て溶け落ちて消滅していた

デフラグ「は、なるほどなあ、ラッキーだなお前
今この瞬間、能力発現つてわけかよ！」

バレット「これが俺の…」

すると炎はデフラグに向かい直進する

デフラグ「でもなあ…！ラッキーはこれまでだ！炎の軌道が操れないなんて誰が言つたんだコラア…！」

すかさずデュアルブート発動

時速120km 重量96.7kg 距離にして半径10m以内であれば操作可能なのだ
炎など簡単に操れるはずなのだ

だがデフラグは気付くと空を見ていた

デフラグ「は…？」

先程の火炎に吹き飛ばされていたのだと
軌道が…変えられない

デフラグ「なッ…んだよ…つか…意味わかんねえぞ…

発動係数は…元素の乱数調整…こいつの炎には精神的な
感性が加わってんのか？

ダメだ全然理解できねえ…！…なんなんだよ…！…お前の炎

はよオ！…

バレット「うるせえ知るか… そんなの！！」 ダッシュ
拳に炎を宿らせデフラグに向かい走り出す
デフラグはもはや一切武器を持つていな
立ち竦^{すぐ}むしかできない

バレット「うおおおおおおお…！」

強烈なパンチが真っ正面からデフラグの顔面に当たった
何mか吹き飛び、デフラグの意識は途絶えた

⋮

数日後

1A教室

あの時俺に宿つた炎は何故デュアルブートを撃ち破ったのか
それは全く分からないが、エリスは無事だった
あのあとすぐに先生が救急車を呼んでくれたおかげで大事には至ら
なかつた

だが…エリスは能力を使えなくなつた

能力についての様々な部分は現代の科学では解明されておらず
医師によると”精神的なショック”が原因だそうだ

エリスは心を閉ざし、家族以外とは口を利かなくなつた

…勿論、俺とも

これからしばらくは入院して精神面をケアしていくそうだ
しばらくは、会えないだろう

バレット「はあ…」

落ち込みなんか気疲れなんか分からぬいため息をつく彼にクラスメイトが話しかけてくる

ビオランテ「どうしたんだいバレット、その哀しい表情は」

アニー・ケイ「仕方ないね…エリスが居なくなつたもんね…至みなく
頑張つてよ」

キヨシ「ですね…まあ…バレットさんがため息つくのは昔からです
が」

バレット「…ああ」

もうじいじつらじ、エリスも一緒に馬鹿みたいに騒いで遊ぶ事はない
んだらうか…

俺はあの日…エリスを守つていたつもりだったのに
苦しめてしまつてたのか？

そう考へてゐるうちに、ふと涙が一粒だけ落ちた

明日からまた頑張ろう

3話 クラスマイト

雲ひとつない晴天で
5月 春特有のぽかぽか陽気で遊びに出るには持つてこいな休日だ
そんな日に、バレット・ルージットもまたクラスマイトと遊ぶ為待ち合わせしていた

バレット「いい天気だなあ」

などとこれ以上ないほど当たり障りのないセリフを吐き
ふと腕時計を見ると昼の一時丁度だった
すると向ひから女の子の声がする

「おまたせでーす」

バレット「おう」

彼女はバレットのクラスマイトであり友人である
名を”キヨシ・サンカズヤ”
黒いショートヘアで瞳の大きい美人さんだ
中学の一年生からの友達だ
いつもは休日は最低でも3人で出かけるのだが
エリスが欠けてしまった為一人きりなのだ

キヨシ「ごめんなさい、待ちました?」

バレット「あ、いや、今来たとこ」

キヨシ「ビオランテくんも誘つたんですけど同じくこれないだそ
うです

セツチコも連絡来てましたよね？」

バレット「あ…いや、『めん俺携帯持つてない』

意外な返答に驚きを隠せないキヨシ

キヨシ「ええ！携帯なんて今どき彼女も友達も居ないぼっちはんで
すい顔持つてますよ！？」

バレット「なんでそんなやつが携帯持つんだよ…

連絡だつたら家に固定電話あるから取れるし」

キヨシ「外出中でも細かい連絡の取り合いとか…とにかく…無いと
不便ですよ！」

今からでも契約してきましょ！携帯…」

バレット「…めんどうさー」

キヨシ「知つてますか？”書は急げ”ですよーバレットさんが携帯
持つてないなんて嫌ですよー！」

バレットの右手を引つ張り

眉間にしわを寄せ大きな瞳でバレットを見つめながら

唇を尖らせ無理やり”携帯ショップ”なるものへ連れていった

（携帯ショップ）

……

店員「はい、では契約完了致しました

ではこちら圧額のプランで……通話料金の……」

あつという間に契約は終わり

そして他様々なお得的な要素満載なサービスプランへの勧誘が始まつた

何故だかキヨシはしたり顔で嬉しそうだ

キヨシ「何気に私と同じ機種ですねバレットさんつ」

バレット「何気に……って、お前が無理やり……

まいいか、腹減つたし飯でも食べに行くかあ」ガタツ

とつあえず朝から何も食べていないので

店員の勧誘を軽くあしらつてさつさと立ち上がる

しかし携帯みたいな小さい機械は全然触った事がないので早く慣れ

る為に携帯をいじりつつ店を出た

バレット「えと……電話……つてもまだ登録してないか」

キヨシ「じゃ私がアドレスと番号送るので携帯を無線待機モードに

……

バレット「いや分からんしなにそれ……」

バレットがキヨシに質問しようとした所で
急に背後から男にぶつかられた
はすみで宙に舞つた携帯をなんとかキャッチしホツと一息ついた所
で辺りを見渡す

「邪魔だつてんだよ！ボウズ！！」

さつきぶつかつた男は覆面とサングラス
両手でカバンを抱えて息を荒くして向こうに走つていった

その直後、後ろから少女の声で

「返してえ！！」

声がした方を振り替えると
恐らくあのカバンの持ち主であろう少女が涙目で腰を崩して座り込
んでいた

キヨシ「ひつたくりですよ！」

バレット「待て！！」

間髪入れず走つてひつたくりを追いかけた
後ろからタックルをかましひつたくりはバランスを崩し電柱に激突
する
カバンは地面に落ちた

ひつたくり「ぐっ…てめえ…ただで済むと…うぐっ…」

鼻を強く打つたひつたくりはしづかめて苦しんでいる

キヨシ「良かつたあ…バレットさん怪我はしませんか？」

バレット「おひ、全くあぶねーな…危づく携帯壊れるとこだつたぞ
女の子「あ…あのーありがとひ」「やれこねす…
な、なんてお礼を、お礼をしたらいいか！
ああの私メイカつて言います！」

長めの茶髪をなびかせる少しあどけない口調の彼女
名を”メイカ・ワットスク”

バレット「いや、大丈夫だつて
ほら、これお前のだろ？」

カバンを拾いメイカに渡すバレット

メイカ「あ、ありがとうございます！本当に助かりました！
その…あのー三万でいいですかー？」

バレット「はー？」

そう言ひと財布から三万円を取りだしバレットに渡そうとしてきた
お礼を期待したわけではないし、周りからは淀んだ視線が飛んでき
て戸惑つ

バレット「いや、いろいろからーお金は大切にしろつてー！」

そんなやつたりをしてこの間に一人の背後から声がした

キヨシ「ややつー?」

先ほどのひつたくりがキヨシを捕まえ
ナイフを首もとにあてがつていた

ひつたくり「オラお前ら動くんじゃねーってんだよ!

女あ!コイツの命がおしけりやそのカバンを寄越しな
つてんだ!」

バレット「お前つ…そんなに女の子のカバンに興味があんのか!」

メイカ「う、え、無理です!渡せませんから!」ダッ

メイカはカバンを持つてあっさり逃げた

その瞬間、彼女のカバンからカードのような物が地面に落ちた

ひつたくり「なつ…このやつ!」

慌てるひつたくりの肩を誰かがポンと叩く

金髪ショートヘアでのっぺりした顔つきの青年だ

?/?/?「おーおータクリ…アレが奴らに渡りやうとはいえ…

こんな真つ直間街道ド真ん中で騒ぎ起じしきやケツから食わ
れちまうぜ?」

タクリ「TKさん…でも…」

どつやうひつたくりの名前はタクリ

謎の男はTKことひつたくり

TKC「まつ、女のケツ追いかけるなんぞ。」「イツ」に任せりやい
いじゃねえか

行け！ジャント！…」

するとTKCの体から紫色の蒸氣が出て
やがておぞましい顔をした巨人へと姿を変えた

周りに居た一般人たちはその姿を見るや一目散に逃げていく

バレット「なつ…お前らはもういこつてんだよ、オラ彼女返してやつ
からせつせと帰れ」

キヨシ「わつ…」

すると先ほどのひつたくりのタクリはキヨシをあつさり返した
手荒く放つた為、バレットの胸に飛び込む形になつた

バレット「おつと、大丈夫かキヨシ？」

キヨシ「あ…はい…それより…なんですかあの巨人…？」

バレット「知らねえ…でもあの女の子を狙つてゐてなら放つてお
けねえな」

TKC「命令はあの女の追跡と取り抑え、さあ行けジャン…ん！？」
ジャント「シユプシャパシエロスシャシヤ」

ふとTKCが紫の巨人”ジャント”の方を見ると
頭部が焼けて苦しいんでいる
バレット「おい!もういいだろーあの女の子になんか恨みでもあるのかー!」

TKC「おうおうなんだ誰かと思えばバレットくんじゃないか、
マイシにケツを掘りられたくなきやせつせと去るんだな」

バレット「なんで俺の名前を……?」

TKC「あいや、随分寂しい事言つなあお前は

バレット「……でもマイシの顔……ビ」かで見たよつな……ビでだ
つけ……」

タクリ「あ……TKCさん、マイシは俺が引き受けますんで、あの
女頼みます」

TKC「おう、頼んだぜ!」

この場をタクリに任せ、TKCは巨人と共にメイカを追いかけた
バレットが止めようとするがタクリの手から放たれた何かに邪魔を
された

バレット「氷……?」

タクリ「俺の能力は”氷狩”アイスショテラーー”
空気中の水分を瞬間凍結させ利用できるってんだよ
お前の炎と対になるよつな力つて訳だな……」

バレット「キヨシ一離れてるー!」

キヨシ「は、はい！」

キヨシを戦いに巻き込まないようにはかせたところでタクリが繰り出してきた

空気中の水分を凍らせ手に余るほどの大ささの氷の塊を三個ほど作りそれをバレットへ向けて飛ばす

バレット「くーーー！」

すかさず避け火球を撃ち放つ

しかしタクリは予め左手に氷で作った盾で身を守った

いくら氷が炎で溶ける。とは言つても一瞬激突した程度では消滅する事はない

バレット「お前らはその能力を女の子一人追いかけ回すのに使うのかよ！」

タクリ「お前、わかつてんのか、俺は”ウイクトルナンバー”元4位の

タクリ・クビクワレだぞ！」

バレット「知るか！そんな名前！！たかだか4位程度で自慢していくんなー！」

そう言つとバレットは先ほどより大きい火球を撃ち放つたしかしまたしても氷の盾で防御された更にタクリは右手に氷で作った大剣を握った

タクリ「こつちにも事情があんだよ、大人しく退いてはくれねーか
命を捨てたくはないだろ?」

バレット「お前、気付いてないようだから教えてやるよ

タクリ「…」

バレット「お前の力ってのは空気中の水分を使って武器や攻撃に利用するんだろ

…ならこの短時間でその盾やら大剣なんか作つたら”空気中の湿気”って奴も沢山奪つてんじやないのか

タクリ「な…！」

その瞬間、バレットの周りを巨大な炎が包んだ
湿気が無くなり空気が乾燥し、火力が著しく上昇したのだ
あまりの熱気にタクリの盾や剣は水に変わり消滅した

バレット「はあああ…！」

まるでドラゴンののような巨大な炎が拳から撃ち出され
タクリは吹き飛ばされ壁に激突し気を失った

バレット「ふう…よし、あのTKCとか言う奴を追いかけないと…」

キヨシ「あ…待ってくださいバレットさん！」

これ、彼女がさつき落とした物なんですけど…」

キヨシが見せてきたのはカードのような物で

メイカの顔写真が貼つてあり、学生証のようにも見えたが丸つきり

違う物だった

それには "good ear" ゴッドイヤー" という彼女が所属している事務所、機関の名前が書いてあり
様々なコードアドレスや数字が羅列されている中
"人権 level 0 , 25" と書かれていた
その文字にただならぬ気配を感じ、バレットの口角は下がり冷や汗
をかいていた

キヨシ「なんか…危なさそうですよ…

あの女の子とは関わらない方がいいんじゃ…」

バレット「いや…彼女が何者であつても、現に今巨人に襲われかけ
てる

俺は助ける、メイカを」

キヨシ「あはは、バレットさんならそう言つと思つてました。私も
付いていいですか？」

バレット「ヤバイと思つたらすぐ逃げろよ」

そう言つと2人はメイカが走つて行つた方向へ同じく走つた
ビル街脇の、一通りの少ない細道に2人の影は消えた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873z/>

アビリティー・ウェイク

2011年12月31日16時52分発行